

闘牛

闘牛は、徳之島など琉球の島々で昔から行われてきた、牛同士に力比べをさせる人気の競技です。スペインの闘牛とは異なり、日本の闘牛では牛たちは他の牛と闘うよう育成・訓練されます。闘牛は非常に人気があり、徳之島では熱心なファンや観客が集う闘牛トーナメントに参加するために約 400 頭もの牛が訓練されています。

闘牛のルール

牛たちは囲いがされた直径約 20 メートルの土俵で闘います。牛たちには身振りや平手打ち、掛け声で彼らを奮い立たせる勢子が付き添います。闘牛のルールは簡単です。牛たちは互いに頭突きをしたり、試合前に研がれた角を使ったりしてぶつかりあいます。先に相手に背を向けるか、逃げた方が負けとなる闘牛の試合は、数秒で勝負がつくこともあれば、それよりずっと長く続くこともあります。30 分以上続いた場合は、観客の同意を得て引き分けとすることができます。闘牛ファンは「突き」から相手のバランスを崩す技に至るまで、数々の複雑なテクニックを知っています。

闘牛の歴史

最初の闘牛試合がいつ行われたのかは正確にはわかりませんが、闘牛は島民が収穫を終えた喜びを祝うための娯楽のひとつとして 16 世紀に始まったとされています。元々は稲作に使っていた牛を闘わせていましたが、後に闘牛に特化した牛が育てられるようになりました。第二次世界大戦後、闘牛の試合は組織化が進み、定期的な興行として行われるようになりました。島には 7 つの闘牛場があります。最も大きな闘牛場にはドーム型の屋根とひな壇型の観客席がついています。

試合スケジュール

毎年 3 回、それぞれ 1 月、5 月、10 月に島内最強の牛を決めるタイトルトーナメントが開催されます。試合は体重別の階級制で、体重 1 トン以上の牛を対象とする無差別級から 700 キロ以下が対象の軽量級まで複数の階級があります。無差別級では横綱（相撲用語で最も強い力士のこと）が決まります。その他の試合は年間を通じて島内各所の闘牛場で行われています。飼い主が牛の練習のために非公式の試合を行うこともあります。

闘牛の育成と世話

今日、闘牛の牛は試合で闘うことを唯一の目的として育成されています。牛はそれぞれ個性を持つ頭の良い動物です。特に賢い個体は学習が早く、惨敗を喫すると落ち込んでしまうことすらあります。闘牛は専用の牛小屋で丹精込めて育てられており、世話をする人はしばしば闘牛を家族の一員のように扱います。牛たちには、1 日 2 回、必要や発達段階に応じて大量の牧草とサトウキビが与えられます。毎日ブラッシングされ、運動のために頻繁に散歩にも連れ出されます。牛の世話をする人が牛を引いて砂浜を歩いたり、浅い岩礁に入って牛の後肢の筋肉を鍛えたりしている光景がよく見かけ

られます。また、後肢と同じくらい重要な首の筋肉も鍛える訓練も行います。闘牛の角は、牛の成長とともにその牛の闘い方に合わせて形が整えられ、試合前には鋭く研がれます。

熱心なファン

年齢を問わず、徳之島の人々はお気に入りの牛の熱心なファンで、トーナメントの際はこぞって応援に駆けつけます。島の大イベントである闘牛大会では、群衆の歓声を太鼓やラッパ、旗、指笛が盛り上げ、闘牛場は熱狂的な雰囲気になります。闘牛たちは試合前には相撲の力士のように化粧まわしを身につけ、ファンは一日中会場のムードを賑やかに保ちます。

安全に観戦

牛は試合中に怪我をすることがあるものの、その怪我の程度は角の鋭さや体の大きさからすると意外なほど軽いものです。勢子は牛と密に連携し、時にはほとんど距離を取らず牛をなだめたり前進するよう指示を出したりしますが、自分に危害が及ばないように抜かりなく注意を払っています。観衆には全く危険はありません。それどころか、ファンたちは我先に自分のお気に入りの牛と一緒に写真に収まろうとし、中には幼い子どもを牛の大きな背中に座らせて写真を撮る人もいます。

牛の所有者

闘牛の牛の所有者は個人や家族、友人のグループ、企業など様々です。これほど大きい動物の飼育、訓練、そしてとりわけ給餌にかかる費用は安くありません。闘牛は一般的に4、5歳でデビューし、7歳で体の大きさが最大に達するため、闘牛の飼育と訓練には相当の費用、時間、そしてエネルギーの覚悟が求められます。酪農牛とは異なり、闘牛の牛は定期的な運動と注意深い世話を必要とします。

試合の日程

闘牛試合の日程や場所は観光オフィスにお問い合わせください。

徳之島観光連盟

〒891-7605 鹿児島県大島郡天城町浅間 1-1

電話番号：+81-997-81-2010